

「ジェット戦闘機の操縦は私の人生でこれまで経験してきたどんなものとも違います」

IWCのブランドフレンドを務めるジム・ディマッテオ*は、25年を超える軍隊生活で機種異なる5つ戦闘機で5,000時間以上の飛行時間を誇る、退役した元米海軍の大佐です。ディマッテオは、このインタビューの中で、伝説の米海軍戦闘機兵器学校「トップガン」、超音速ジェット機の操縦、コックピットで感じる恐怖、ジェット戦闘機パイロットにとっての時間の重要性、海軍飛行士として人生から学んだ教訓について語っています。

米海軍航空隊におけるトップガンの意義とは何でしょうか？

トップガン、すなわち米海軍戦闘機兵器学校に入ることはすべての若い戦闘機パイロットの夢です。部隊で若手のパイロットであれば、トップガンに選ばれるような人間になりたいと思うでしょう。この栄誉あるプログラムを卒業することは、戦闘機パイロットとしての優れた戦術的および技術的スキルを習得できるだけでなく、一流飛行士としての評価を確立することでもあります。そしてそれはその人の経歴に大いに役立つでしょう。トップガンの記章を肩に付けていれば、あなたが何者であり、他と比べてどういう立場にあり、何を成し遂げた人物であるかが誰もがすぐ理解します。

トップガンのコースに学ぶとはどういうものなのでしょうか？

極めて挑戦しがいがあり、やるべきことが信じられないくらいあります。3カ月のコース期間中は飛行技術の向上と戦術の習得にひたすら集中するのみで、他に気が行く余裕などありません。文字通り、食べて、寝て、息をして、トップガンを夢見るのです。その分、卒業するときには、能力と自信の頂点に立つ、それまでで最高の自分になることができます。ランナーがマラソンを終えた瞬間の感覚に近いのではないのでしょうか。大きな誇りと成し遂げたことへの満足感を味わうでしょうが、同時に疲れ切って、自宅か元居た部隊に戻りたい気持ちになるものです。

コースの内容はどのようなものなのでしょうか？

トップガンの最初の部分では、理論に基づいた多くの訓練や授業が行われます。自分たちの兵器システムや戦術だけでなく、敵側の兵器システムや戦術についても幅広い知識を身につけることができます。次のステージでは、

この座学で学んだすべてを空に持ち込み、あらゆる戦術や機動の実践に移ります。もちろん、教室に座って学ぶよりも超音速で大空を飛ぶ方がはるかに大変です。私たちは、長年このような指導を続けており、プロセスの効果は十分に実証されています。最終的には、エリート飛行士が最高の状態で送り出され、彼らは元の部隊に戻って今度は他の隊員に教えるのです。

なぜ「先生を教える」というコンセプトがこれほど有効なのでしょう？

まず、米海軍戦闘機兵器学校が、現在の戦術、戦略、脅威分析に関して常に知識の頂点を極め続けることができます。戦術や戦略というものは絶えず進化するものであって、トップガン・コースの内容も毎回異なるはずで、2つ目の利点は乗数効果。トップガンは、少数の精鋭のみを訓練しますが、彼らが習得した専門技術は、米海軍と海兵隊のすべての戦闘機パイロットや搭乗員に継承されます。

卒業後は、栄誉あるトップガン・アドバーサリー（仮想敵機）飛行隊に招かれました。これはどのようなものなのでしょうか？

トップガンの通常の格闘戦では原則として3人のプレイヤーがいます。訓練生、教官、敵（アドバーサリー）です。敵役のパイロットは、「悪者」のプロとしての訓練を受けています。敵となる航空機の性能のみならず、敵方のパイロットの考え方や戦術についてもシミュレートを行います。敵役のパイロットの目標は、訓練生の上達を支援できるようなシナリオを提供することです。私にとって、日々学びを深め、成長していく姿を見ることは、この仕事で大いに報われる部分です。

F/A-18ホーネットのようなジェット戦闘機の操縦はどのようなものですか？

ジェット戦闘機の操縦は私の人生でこれまで経験してきたどんなものとも違います。荒々しいジェットコースターや極めて攻略が難しいサーキットに例えられるのを聞いたことがあります。足元にも及びません。信じられないほどの身体的能力、分析力、情熱を必要とする爽快な体験です。一番素晴らしいのは、このすべての分野において同時に10点満点を叩き出すことです。格闘戦を終えてコックピットから出るときは、肉体的にも精神的にも疲れを感じるだけではなく、気力にあふれ、思わず笑みがこぼれたものです。これまで経験してきたどんなものとも比べることはできません。だから私には、海軍航空隊の一員であったことがとてつもなく幸運に思えます。

超音速飛行についてはどうですか？

低高度での超音速飛行は、すべてが信じがたいほど高速で起こるので、スリル満点で、その分やりがいがあります。頭脳は常にジェット機の1マイル先を見通しておかねばなりません。私たちが「ジェット機に後れを取る」と呼ぶ状態になると、事の起こる方が速すぎてもはやマッスルメモリーだけで反応している事態に陥っているため、非常に危険なのです。

ジェット戦闘機の操縦は身体的にはどのようなものですか？

たとえば格闘戦中に急旋回や垂直機動を行うと、パイロットには大きなG（重力加速度）が加わります。これにより血液が頭部から足元に下がるため、視界と意識レベルの両方に支障をきたします。最悪の場合、失神して意識不明になることさえあります。私たちがこれをG-LOC（Gによる意識喪失）と呼んでいます。これを避けるために、G制限機動と耐Gスーツを組み合わせて対策が取られています。耐Gスーツは、下半身と腹部を締め付けることで血液が足の方へ下がるようにするものです。また、Gの増大に耐えようとする中で、主に首や脊椎、背中に肉体的苦痛を引き起こすことがあります。9Gが加わった場合、頭の重さは100ポンド（45kg）を超えます。これでどんな感じが想像できるでしょう。

コックピットで恐怖を感じたことはありますか？

適度な恐怖心は、特に飛行中の過酷な状況では、頭の回転の速さ、注意力、予想される危険への警戒心慮を維持する方に作用します。通常、若いパイロットの方が年配よりも恐怖心を感じるものです。経験を積んでいくと、困難な状況ではこの恐怖心を利用して集中力を高めることができるようになります。ただし、この段階で自信過剰にならないように注意する必要があります。さらに年齢が上がると、再び注意深くなる傾向があります。最も経験を積んだパイロットともなれば、自分たちには周囲で起きていることの90パーセントしか見えないことを知るからこそ、

複数機の格闘戦にただ飛び込むことをためらうこともあるでしょう。俗に言うように、老練なパイロットはいる、向こう見ずなパイロットもいる、しかし老練で向こう見ずなパイロットはいないのです。

特に記憶に残っている危険な状況はありますか？

何しろ25年以上も戦術を駆使した飛行を行ってきたので、振り返ってみて危機一髪だったと言える状況はたくさんあります。中でも思い出すのは、F-14トムキャットを操縦していたときのことで。夜間に片方のエンジンが停止したままの状態です。着艦する必要が生じたのです。おまけに運の良いことに、ひどい天候でした。闇夜、縦揺れする甲板、陸地からは1,000マイル以上。よく覚えていますが、それでも訓練どおりに体が動き、マッスルメモリーが安全な着艦進入に導いてくれました。

他に危険な出来事はありましたか？

実戦や模擬格闘戦でも同じように危機一髪の状況は何度かありました。覚えているのは格闘戦での異常接近で、相手のパイロットが私に気付かないまま、土壇場になって私の直前で上昇したのです。あれほど近くですれ違ったことはそれまでありませんでした。相手のエンジン音さえ聞こえ、ジェット後流を通過するときには大きな衝撃を感じました。その時点で格闘戦は中止となり、着陸しました。それから、そのような事態を二度と繰り返さないために、なぜどのようにして起きたのかを話し合いました。私たちはこうした状況であっても99.9パーセント成功するという事実は、米海軍航空隊、そして戦闘機パイロットの訓練手法にとって実に名誉なことです。

人生の他の場面に応用できるようなトップガン・コンセプトはありますか？

米海軍戦闘機兵器学校では、数多くの学ぶべき人生の教訓が得られます。当然のことながら卓越性の追求。おそらくこれが最も基本的なコンセプトでしょう。懸命に取り組む、準備を怠らない、大きな目標を掲げる、そして報告、改善。責任の文化もあります。指揮官に「了解しました」と言えば、その任務に全責任を負うこととなります。後は確認する必要はなく、ただやり遂げるだけです。トップガンは、フライトを報告する文化にも定評があります。時に苦痛に感じられるほど長く詳細にわたることがあってもです。嘘偽りなく自分に正直に、改善できる点を正確に報告する必要があります。どんなに優れたパイロットも失敗を犯すものですが、自らの失敗を認め、正すことができるのが真に優れたパイロットです。ここに挙げたコンセプトは、たいのの仕事や人生の場面に大いに応用できると私は思います。

ジェット戦闘機パイロットは、一匹狼ですか、それともチームプレイヤーですか？

米海軍航空隊では個人の勝利を重視しません。何事もチームの勝利と考えるのです。個人としてできる限りの努力を尽くしますが、成功や失敗は常にチームのものです。空母への着艦を考えてみてください。パイロット1人で成し遂げられることではありません。艦上の文字通り数千人にそれぞれの職務を果たしてもらう必要もあります。F1マシンのタイヤ交換にも似ています。全員が各自の仕事を全うしなければ、どんなに優れたドライバーであろうと何もできません。

信頼はどれほど重要なのでしょうか？

信頼は、この素晴らしい飛行チームの一員であるうえで欠かせないものです。たとえば、ペアを組む相手には全幅の信頼を置く必要があります。ミッションの成功、そして最終的には互いの命を守るために頼り合っているのですから。信頼は時間をかけて築かなくてはならないものです。割り当てられたり、命令されたり、階級や経験に結び付いているものではありません。不可欠なものでありながら、日々努力して築かなければ、失われることがあります。

正確さや細部へのこだわりを重視されますか？

夜間の空母への着艦は、特に悪天候で海が荒れているような場合は、航空機の操縦の中でも最も困難な任務のひとつです。これには驚くほどの正確さを必要とします。海軍パイロットとして訓練を開始した瞬間から、教官は、常に正確に、あらゆる細部に注意を払うことを訓練生の頭に叩き込むでしょう。どんなミッションでも私たちは過剰なほど準備に努めます。その理由は単純。過ぎるほど準備をしておけば、うまくいかないことにも容易に対応できるからです。

ジェット機のcockpitでの時間の役割は何ですか？

ジェット戦闘機のミッションにおいて時間以上に重要なものがあるとは思えません。すべてはタイミングです。ブリーフィングを始めるとき、最初に行うのは全員の時計を合わせることです。発艦から合流、同時弾着射撃（TOT: TimeOnTarget）まで、すべての任務は秒単位の精度で調整されています。もちろん、現代のジェット戦闘機には最先端のアビオニクスシステムが搭載され、計器盤にはGPS同期時計が埋め込まれています。しかし、ジェット機に乗り込む前にそろって移動し、システムの正常な動

作を確認するためにアビオニクスをダブルチェックし、そして何よりも自分たちを格好よく見せるために、私たちは腕時計を使用します。すべての戦闘機パイロットには人目を引く時計が必要です。

パイロット人生において完璧なフライトはありましたか？

卓越性の追求というコンセプトに則れば、常に何らかの改善の余地があります。自分のフライトをどう捉えようと、詳細かつ正直な報告を行えば、必ずもっとうまく対処できたかもしれないという点が見つかるものです。25年間の間に多くのフライトを成功させてきましたが、完璧なフライトは一度もありません。

*【補足】：ジム・ディマッテオ米海軍大佐（退役）の発言および意見はご自身のものであり、米海軍または関係機関を代表するものではありません。

*ジム・ディマッテオについて

ジム・ディマッテオは、1986年にカリフォルニア大学バークレー校（CAL）を卒業後、米海軍に海軍飛行士として入隊し、後に前例のない実績を築き上げました。大佐で退役するまで、25年を超える在籍期間中に5種類の戦闘機（F/A-18、F-16、F-14、F-5、A-4）を乗りこなし、米海軍航空隊の歴史においてただ一人、5,000時間以上の飛行時間を積み重ねました。海軍戦闘機兵器学校を卒業し、実戦を経験した後に荣誉あるトップガン・アドバーサリー飛行隊に招聘されます。そこで、トップガン・アドバーサリーとしては米海軍および海兵隊史上最長となる飛行時間を達成し、最終的にはVFC-111およびVFC-13アドバーサリー飛行隊の司令官に任命されています。両飛行隊の司令官を務めた後、さらにカリフォルニア州サンディエゴの海軍航空隊の本部への異動を請われ、トップガン・アドバーサリー・プログラムを監督する海軍航空司令部（CNAF）で活躍しました。ジム・ディマッテオは、「US Navy F-14 Fighter Pilot of the Year for the RAG」、「US Navy Adversary Pilot of the Year」、「Top Hook」（空母への着艦技量が最優秀の者に贈られる）、イギリスの名誉ある「International Britannia Award」を含め、数々の賞と荣誉を得てきました。2018年には、航空における生涯の功績が認められて、航空殿堂入りという最高の荣誉を授けられています。

IWCシャフハウゼン

1868年、米国の時計技師であり、起業家でもあったフロレンタイン・アリオスト・ジョーンズはボストンからスイスへ渡り、シャフハウゼンに「インターナショナル・ウォッチ・カンパニー」を設立しました。彼が描いた夢は、先進的なアメリカの製造方法とスイスの時計技師たちが持つ優れた職人技を組み合わせ、その時代の最高の懐中時計を作ることでした。そして彼はIWCの独創的なエンジニアリング手法の基礎を築き上げ、スイスの地で機械式時計の集中生産を確立しました。

IWCシャフハウゼンは150年にわたる歴史の中で、正確かつ頑丈で、顧客にとって使いやすいクロノグラフやカレンダーなどの機能を組み合わせた時計を生み出すことで高い名声を得てきました。またIWCは、チタンやセラミックなどの素材の先駆者であり、チタンアルミやセラタニウム®などの先進的な素材を用いたテクニカルウォッチケースの製造もおこなっています。華やかな装飾よりも「形態は機能に従う」という原則を優先するスイス時計メーカーとして、時代を超越した製品への思いは、まさに人生を旅するオーナーたちの夢と志を体現しています。

IWCは、責任を持って素材を調達し、環境への影響を最小限に抑える措置を講じながら、何世代にもわたり受け継がれる持続可能な時計を生み出しています。また、すべての従業員に快適な職場環境を提供し、誇りをもって未来を担う時計職人とエンジニアたちへのトレーニングを実施しています。さらに、IWCは子供たちと青少年への支援に向けて世界的に活動している組織とも提携しています。

ダウンロード

トップガン・コレクションの画像は、press.iwc.comからダウンロードいただけます。

お問い合わせ

IWCシャフハウゼン

広報部門

Email press-iwc@iwc.com

Website press.iwc.com

インターネットおよびソーシャルメディア

Website iwc.com/ja

Facebook facebook.com/IWCWatches

YouTube youtube.com/iwcwatches

Twitter twitter.com/iwc

LinkedIn linkedin.com/company/iwc-schaffhausen

Instagram instagram.com/iwcwatches_jp

Pinterest pinterest.com/iwcwatches